

第2講

勸進上人重源、頼朝を動かす！ (2024年度第2問) — プロジェクトX「大仏再建」—

東大寺の再建に関する次の(1)～(4)の文章を読んで、下記の設問A・Bに答えよ。

- (1) 朝廷は、1180年に焼失した東大寺の再建を、人々から広く財物の寄付を集めておこなうこととした。その責任者に任じられた重源は、宋に渡った経験もあった。
- (2) 重源は、後白河院から庶民に至る広範な人々に寄付をよびかけた。これを受けて藤原秀衡は奥州産の金の寄付を約束し、源頼朝は米や金、絹など、たびたび多額の寄付をおこなった。
- (3) 大仏の鑄造は当初、技術者不足で難航していたが、重源は、宋から来日していた商人で、技術にも通じていた陳和卿を抜擢し、これを成功させた。また伽藍の造営には大仏様とよばれる建築技法が用いられた。
- (4) 1191年、頼朝は周防国で伐り出された材木を翌年中に東大寺に運搬するよう、西国の地頭に命じた。さらに1194年には、畠山重忠や梶原景時ら有力御家人たちの責任で仏像や伽藍を造営するよう命じた。

設 問

- A 東大寺再建に用いられた技術の特徴について、その背景にふれながら、2行(60字)以内で説明せよ。
- B 源頼朝は東大寺再建にどのように協力したか。頼朝の権力のあり方に留意しつつ、3行(90字)以内で説明せよ。

解いてみましょう（第2講）Aについて

1 問われている（求められている）ことを確認する。

ア を書く。

イ にふれながら書く。

ウ 2行（60字）以内で書く。

2 資料と教科書（山川出版社『詳説日本史探究』）の内容とを照らし合わせる。
関係する教科書のページと内容は、

教科書の 99 ページの 2 行目～5 行目



日宋間の正式な国交は開かれなかったが、平氏政権の積極的な海外通交後、鎌倉幕府のもとでも、民間商人の貿易や僧侶・商人の往来などはさかんにおこなわれ、日本列島は南宋を中心とする東アジア通商圏の中に組み入れられていった。

教科書の 108 ページの 1～10 行目



芸術の諸分野でも新しい傾向がおこっていた。そのきっかけとなったのは、源平の争乱によって焼失した奈良の諸寺の復興である。重源は勸進上人となって復興資金を広く寄付に仰いで各地をまわり、宋人陳和卿の協力を得て東大寺の再建にあたった。その時に採用されたのが、大陸的な雄大さ、豪放な力強さを特徴とする大仏様の建築様式で、東大寺南大門が代表的遺構である。つづいて、禅宗様(唐様)が伝えられた。この様式は細かな部材を組み合わせて、整然とした美しさを表わすのが特徴で、円覚寺舍利殿などの禅寺の建築に用いられた。

3 与えられた資料をもとに作成した「東大チャート」を解く。

次のページに「東大チャート」があります。上記の空欄に当てはまる語句も記されています。

東大チャート 「東大寺再建に用いられた技術の特徴とその背景」 (2024 年度第 2 問設問 A)

(に、ほぼ抜き出して入れる。)

求められていることは

ア **東大寺再建に用いられた技術の特徴** を書く。

イ **その背景** にふれながら書く。

(3) 大仏の鑄造は当初、技術者不足で難航していたが、重源は、宋から来日していた商人で、技術にも通じていた陳和卿を抜擢し、これを成功させた。また伽藍の造営には太仏様とよばれる建築技法が用いられた。

【教科書の記述】
 芸術の諸分野でも新しい傾向がおこっていた。そのきっかけとなったのは、源平の争乱によって焼失した奈良の諸寺の復興である。重源は勸進上人となって復興資金を広く寄付に仰いで各地をまわり、宋人陳和卿の協力を得て東大寺の再建にあたった。その時に採用されたのが、大陸的な雄大さ、豪放な力強さを特徴とする太仏様の建築様式で、東大寺南大門が代表的遺構である。つづいて、禅宗様(唐様)が伝えられた。この様式は細かな部材を組み合わせ、整然とした美しさを表わすのが特徴で、円覚寺舍利殿などの禅寺の建築に用いられた。
 (P108. L1~10)

【教科書の記述】
 日宋間の正式な国交は開かれなかったが、平氏政権の積極的な海外通交後、鎌倉幕府のもとでも、民間商人の貿易や僧侶・商人の往来などはさかんにおこなわれ、日本列島は南宋を中心とする東アジア通商圏の中に組み入れられていった。
 (P99. L2~5)

① は宋から来日していた

② で ③ でもあった陳和卿の ④ でつくられた。

東大寺南大門などの ⑤ には ⑥ という ⑦ から ⑧ 建築技法が用いられた。

その背景には、 ⑨ 間の ⑩ がさかんで、重源などの ⑪ や ⑫ がさかんに ⑬ していたことがあった。

(1) 朝廷は、1180 年に焼失した東大寺の再建を、人々から広く財物の寄付を集めておこなうこととした。その責任者に任じられた重源は、宋に渡った経験もあった。

抜き出したものをまとめる

⑨ 間の ⑩ がさかんで、⑪ や ⑫、⑬ が
さかんに ⑭ しており、⑮ には陳和卿の ⑯ が用いら
れ、東大寺南大門という ⑰ では、⑱ という ⑲
から ⑳ 建築技法が用いられた。

4 60字に要約する。

解いてみましょう（第2講）Bについて

1 問われている（求められている）ことを確認する。

ア 源頼朝は を書く。

イ に留意して書く。

ウ 3行（90字）以内で書く。

2 資料と教科書（山川出版社『詳説日本史探究』）の内容とを照らし合わせる。
関係する教科書のページと内容は、

教科書の 91 ページの 18 行目～92 ページの 6 行目から抜粋



反平氏の諸勢力のうち、東国の武士団の大半が武家の棟梁源氏の嫡流である頼朝のもとに結集したため、頼朝はもっとも有力な勢力に成長した。頼朝は挙兵すると、相模の鎌倉を根拠地として広く武士たちと主従関係を結び御家人として組織し、東国の荘園・公領を支配して彼らの所領支配を保障していった。（略）義経が法皇から頼朝追討令を与えられて挙兵するも失敗すると、頼朝は軍勢を京都に送って法皇にせまり、義経追討を名目として諸国に守護を、荘園や公領には地頭を任命する権利や1段当たり5升の兵糧米を徴収する権利（略）を獲得した。こうして東国を中心にした頼朝の支配権は西国にもおよびはじめ、武家政権としての鎌倉幕府が確立した。

その後、頼朝は逃亡した義経をかくまったとして奥州藤原氏を滅ぼし、陸奥・出羽を支配下においた。1190（建久元）年には上洛して右近衛大将となり、1192（建久3）年、後白河法皇の死後には、征夷大將軍に任ぜられた。こうして鎌倉幕府が成立してから滅亡するまでの時代を鎌倉時代と呼んでいる。

教科書の 92 ページの 23～28 行目及び注4



幕府支配の根本となったのは、將軍と御家人との主従関係である。頼朝は主人として御家人に対し、おもに地頭に任命することによって、先祖伝来の所領の支配を保障したり（本領安堵）、新たな所領を与えたりした（新恩給与）。この御恩に対して御家人は、戦時には軍役を、平時には京都大番役や幕府御所を警護する鎌倉番役などをつとめて、従者として奉公した。

注4：地頭は平氏政権のもとでも一部におこれていたが、頼朝はその職務を頼朝は地頭の職務を、明確にするとともに、任免権を国司や荘園領主から奪って幕府の権利とした。

3 与えられた資料と教科書の記述から抜き出して作成した「東大チャート」を解く。

次のページに「東大チャート」があります。上記の空欄に当てはまる語句も記されています。

東大チャート「東大寺再建事業と頼朝の動き」(2024年度第2問設問B)

([] は、ほぼ抜き出して入れる。 [] へは、考えて決めゼリフを入れる。)

求められていることは

ア 源頼朝は **東大寺再建にどのように協力したか** を書く。

イ **頼朝の権力のあり方** に留意して書く。

(2) 重源は、後白河院から庶民に至る広範な人々に寄付をよびかけた。これを受けて藤原秀衡は奥州産の金の寄付を約束し、源頼朝は米や金、絹など、たびたび多額の寄付をおこなった。

【教科書の記述】

反平氏の諸勢力のうち、東国の武士団の大半が武家の棟梁源氏の嫡流である頼朝のもとに結集したため、頼朝はもっとも有力な勢力に成長した。頼朝は挙兵すると、相模の鎌倉を根拠地として広く武士たちと主従関係を結び御家人として組織し、東国の荘園・公領を支配して彼らの所領支配を保障していった。(略) 義経が法皇から頼朝追討令を与えられて挙兵するも失敗すると、頼朝は軍勢を京都に送って法皇にせまり、義経追討を名目として諸国に守護を、荘園や公領には地頭を任命する権利や1段当たり5升の兵糧米を徴収する権利(略)を獲得した。こうして東国を中心にした頼朝の支配権は西国にもおよびはじめ、武家政権としての鎌倉幕府が確立した。その後、頼朝は逃亡した義経をかくまったとして奥州藤原氏を滅ぼし、陸奥・出羽を支配下においた。1190(建久元)年には上洛して右近衛大将となり、1192(建久3)年、後白河法皇の死後には、征夷大將軍に任ぜられた。こうして鎌倉幕府が成立してから滅亡するまでの時代を鎌倉時代と呼んでいる。(PP91.L18~92.L6より抜粋)

【教科書の記述】

頼地頭は平氏政権のもとでも一部におかれていたが、朝はその職務を頼朝は地頭の職務を明確にするとともに、任免権を国司や荘園領主から奪って幕府の権利とした。(P92.注4)

(1) 朝廷は、1180年に焼失した東大寺の再建を、人々から広く財物の寄付を集めておこなうこととした。その責任者に任じられた重源は、宋に渡った経験もあった。

(4) 1191年、頼朝は周防国で伐り出された材木を翌年中に東大寺に運搬するよう、西国の地頭に命じた。さらに1194年には、畠山重忠や梶原景時ら有力御家人たちの責任で仏像や伽藍を造営するよう命じた。

重源が広く寄付をよびかけると、それを受けて

① [] の藤原秀衡は奥州産の金の寄付を約束した。源頼朝はそれへの② [] もあり、③ [] 。

頼朝は④ [] の嫡流として東国の武士たちと広く⑤ [] を結んで⑥ [] として組織していた。義経追討を名目として⑥ [] を諸国に守護、荘園・公領に⑦ [] として⑧ [] する権利を後白河法皇から獲得して、頼朝と⑥ [] との⑤ [] を⑨ [] に⑩ [] させた。

① [] を⑪ [] て、唯一の④ [] の地位を⑫ [] した。

こうして⑬ [] としての幕府が⑭ [] すると⑦ [] に⑮ [] として⑮ [] 。

【教科書の記述】

幕府支配の根本となったのは、将軍と御家人との主従関係である。頼朝は主人として御家人に対し、おもに地頭に任命することによって、先祖伝来の所領の支配を保障したり(本領安堵)、新たな所領を与えたりした(新恩給与)。この御恩に対して御家人は、戦時には軍役を、平時には京都大番役や幕府御所を警護する鎌倉番役などをつとめて、従者として奉公した。(P92.L23~28)

抜き出したものをまとめる

重源が広く寄付をよびかけると、それを受けて ① が奥州産の金の寄付を約束した。源頼朝はそれへの ② もあり、③ 。

① を ⑪ て、唯一の ④ の地位を ⑫ した。義経追討を名目に ⑥ を荘園・公領に ⑦ として ⑧ する権利を獲得して、以前より結んでいた頼朝と ⑥ との ⑤ を ⑨ に ⑩ させた。

こうして ⑬ が ⑫ すると、⑦ に ⑭ として ⑮ 。

4 90字に要約する。

今回、問題を解くことで学んだこと